

可被得其意候。以上。

十月十日

四六 頼母子銀停止之儀觸

頼母子銀、向後無用之事。

右被仰出候條、組中可被申觸候。以上。

寛文二年四月八日

四七 御步行以下御呢近衆に對

する作法之儀觸

御供御步行・御鷹匠并足輕・小人、其外御家中又若黨・小者・草履取之儀は不及申、御呢近衆罷通候刻、高腰を懸道をせばめ、其外慮外之躰不仕様、自分組中共急度被申渡候様に、何も被相觸、御横目申茂可被申付候。恐々謹言。

寛文四年四月二十二日

四八 疱瘡送停止之儀觸

頃日疱瘡はやり候に付、致送物群集之由に候。堅御停止之

條、是以後左様之送物不仕様に、家來下々迄急度申付候様、房州・因州組中可被申觸候。以上。

五月二十九日

長九郎左衛門
今枝民部

小幡宮内

奥村河内

前田對馬

横山左衛門

本多安房殿 留守居

奥村因幡殿 留守居

四九 躍・人形遣興行停止之儀

御觸

躍・人形遣など跡々より御停止候處、頃日京都より參、御家中方々にて興行有之、宿をも先々にて貸申由に候。殊に一兩年は除知之衆も多、萬端可有簡略旨被仰出候處、不入儀に候。御横目を出し、急度相改候之間、右之通御觸渡、判形御取置被成御尤に奉存候。以上。

十月晦日

多賀左近

津田源右衛門

本多安房様

横山左衛門様

長九郎左衛門様

奥村河内様

前田對馬様

奥村因幡殿 留守居

五〇 請地之儀御定

覺

一、向後御家中面々、百姓地を受、茶園又は作事等仕候儀御停止に被仰出候事。

一、百姓地を請、面々家來指置候はで不叶候はゞ、人數以下様子其組頭承届、以添書御算用場々相斷、百姓相對之上請地可仕事。

一、三千石以上、下屋敷被下置候面々は、請地有間敷事。

寛文六年八月八日

五一 侍中召連徒者人數之儀御定

定

一、自分知百五十石以上召連徒侍一人か二人

一、同千石以上 同三人か四人

一、同五千石以上 同五人か六人

一、同一萬石以上 同七人か八人

一、同二萬石以上 同九人か十人

但、合力米之面々可應此數量也。

一、寄合之面々、并火消當番人牽馬格別之事。

一、惣領一人は、隨父分限からろく召連可申、二男以下猶以すくなく可召連事。

右之通出仕、或金澤中常往還、或於江戸御供御使之節可召具之。從是不足は不苦、多召連候儀は無用之旨被仰出者也。

寛文六年八月十五日

五二 江戸に鐵炮遣候事制禁之

儀觸